様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５　月　２３　日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：２００９　～２０１０
課題番号：２１８３００８３
研究課題名（和文）学士課程教育の構築へ向けた「入学者受入れの方針」に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical study on "Admission policy" to discuss Undergraduate.

研究代表者
西郡　大（NISHIGORI DAI）
佐賀大学・アドミッションセンター・准教授
研究者番号：30542328

研究成果の概要（和文）：
本研究では，受験勉強や受験対策といった受験経験がもたらす効果について検討した。その結果，受験勉強に達成感を持つ者ほど，受験勉強の効用を肯定的に捉える傾向があった。また，受験経験がもたらす成長感についても，「忍耐力」「集中力」「思考力」といったものだけでなく，「感謝の心」「対人関係」「協調性」といった情動的な側面もみられた。さらに，こうした認識が醸成される状況に関して，高校教員に実情をインタビューすることで，彼らの高校生活における具体的な場面の一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research was to examine the effect caused by experience which high school students have prepared for the university admission. As a result, I confirmed that the more accomplishment they have, the more positive they think effect of examination study. I knew that they got not only the ability for " endurance ", " concentration ", "thinking" but also "thanks", " human interaction ", " cooperativeness " throughout the experience of studying for admission. Moreover, I investigated how these abilities or skills had been created throughout their experience by interviewing their teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	890,000	267,000	1,157,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	1,690,000	507,000	2,197,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育社会学
キーワード：入学者受入れの方針・大学入試

１．研究開始当初の背景

（1）2008 年末に「学士課程教育の構築に向けて」（中教審,2008）が答申され，「学位授与の方針」，「教育課程編成・実施の方針」，「入学者受入れの方針」の 3 つの方針が謳われた。

（2）「入学者受入れの方針」に関する議論の中心は大学入試研究であることが考えられるが，近年の入試研究の動向を調査した結果からは，アドミッション・ポリシーに沿った人材を採れているかという入試方法や評価方法に関する正当性や妥当性の検証が中心的なテーマであることが読み取れる。こうしたテーマは，大学教育の質を保証する観点から大学と高校との接続の在り方を見直そうとする同方針の一端を議論してはいるものの，「入学者受入れの方針」の明確化に具体的に応えていくためには不十分であると考えられる。

２．研究の目的

本研究では「入学者受入れの方針」に注目し，選抜機能が低下した「大学全入時代」とも呼ばれる現状において，大学入試へ向けた受験経験を通して，受験者がどのような能力や資質を身に付けているのかを検証することで，同方針を議論する上で考慮すべき１つの視点を提供した。

３．研究の方法

(1) 大学進学を志望する高校生の大学入試の受け止め方に注目し，「主要教科を中心とした基礎的な学力を評価するペーパーテスト」と「ペーパーテスト以外の評価方法」を主軸に，それぞれの評価方法が選好される要因は何なのか，また，その要因はどのような属性に影響を受けているのかを検討した。

(2) 2008 年 3 月に東北，東海地域における 3 校の高等学校 3 年生を対象に行った「高校生の大学入試に関する受け止め方の調査」のデータを用いて受験勉強がもたらす影響力について分析した。調査対象の高校は各地域におけるいわゆる「進学校」である。生徒の多くが国公立大学を第一志望にしており，合否結果に対する関心度が相当に高いことが考えられる。合否結果は各自の入試制度に対する肯定感・否定感を強く規定することが確認されており，合否結果の要因を取り除くことが回答者の純粋な意見であると解釈できる。したがって，調査時期を国公立大学の前期日程終了後で合格発表前にアンケートの回答を実施するように依頼した。

本研究では，「受験勉強なんてものは，将来，全く役に立たないと思う」(5 件法) と「受験勉強は，十分にやり切ったと思う」(5 件法) の２つの項目を利用し，受験勉強に対する受験生の意見構造を分析した。具体的には，後者の項目を「やり切ってない群(Ⅰ群)」(301 名)，「どちらとも言えない群(Ⅱ群)」(281 名)，「やり切った群(Ⅲ群)」(335 名) と受験勉強に対する彼らの達成感を 3 群に分けた。そして，「受験勉強なんてものは，将来，全く役に立たないと思う」という回答について，各群の平均値を分散分析によって比較し，それぞれの特徴を明らかにした。

(3)「方法 (2)」によって，受験勉強を一生懸命頑張って達成感を持った受験生は，受験勉強の有効性を肯定的に認識する傾向が確認された。この点を踏まえ，彼らが受験経験を通して，一体何が成長したと感じているのかを検証するために，2009 年度の S 大学学部新入生に対して実施したアンケートの一部に，「受験勉強や受験対策など受験生という経験を通して，何か成長できたと感じるものがありますか。『ある』とした場合は，その内容についても具体的にお書き下さい。」という自由記述項目を加え，その実態を調査した。そして，ここで得られた各回答を吟味し，類似した意味内容をカテゴリー化した。

(4)「方法 (3)」では，14 のカテゴリーを抽出することができたが，各カテゴリーに対する気持ちの強弱までは把握することができなかった。そこで，翌年 (2010 年度) の学部新入生アンケート調査では，上記 14 カテゴリーに「成長したものは無い」という意味の「特になし」という項目を加えた合計 15 の選択方式に改修した。質問文は，「受験勉強や受験対策など受験生という経験を通して成長できたと感じるものを，次の中から３つまで選び，気持ちの強い順に，〔回答欄〕へ数字をご記入ください。なお，3 つ未満の場合は，あるものだけで結構です」とし，気持ちの強い順に 3 つ選択させた。

回答者が選択したカテゴリーには，最も気持ちの強いものから 3 点，2 点，1 点と点数を付与し定量的に分析した。本研究では，回答者の全体的な傾向に関心があるため，各カテゴリーの合計得点を用いた。つまり，合計得点が大きいカテゴリーは，多くの受験生が受験経験を通して成長したと感じやすいものであり，反対に合計得点が小さいカテゴリーは，少数派の受験生に支持されるカテゴリーと解釈できる。これらの得点について，性別，志望強度 (第一志望か第一志望以外)，入試方法別，学部系別といった属性別にみることで，それぞれの特徴を検討した。

(5) 上記のカテゴリーのような認識は何かしらの経験があったからこそ，成長感を感じることに繋がっていることが考えられる。そこで，受験生を指導する高校教員の意見をヒアリングすることで，具体的な高校生活の場面にアプローチした。実際には，これまでの分析結果をまとめた資料を提示しながら，各高校教員に分析概要を説明し，各カテゴリーが高校生活のどういった具体的な場面を通して醸成されているのかについて意見を求めた。特に，「感謝の心」「対人関係」「協調性」といった情動的側面を持つカテゴリーについて詳しく尋ねた。なお，回答者には，一般的な意見ではなく個人的な経験に基づく具体的な場面を求めている。こうした意見収集によって，46 校の高校教員から有効回答を得ることができた。

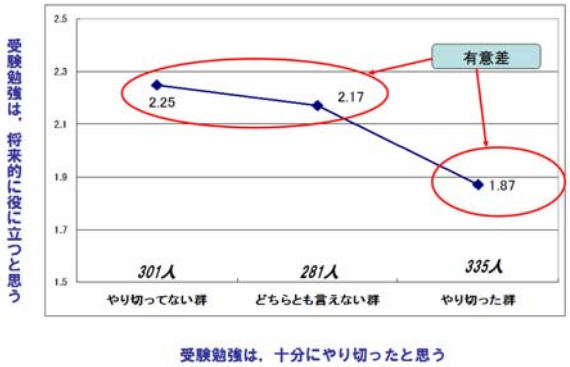
４．研究成果

(1)「方法 (1)」で得られた知見は，各大学において選抜方法や評価方法を議論する際の具体的な視点となりうる。例えば，「志願倍率を上げることが優秀な学生確保に繋がる」ということを拠りどころにして，国立大

学の理系学部において，入試科目の軽量化や学力検査(ペーパーテスト)を課さない選抜方法を通して志願者を確保しようとするならば，志願者心理について十分に留意しなければならない。というのも，国立大学志望の理系クラスでは，「学問・研究志向」が強く，「受験勉強肯定観」との相関も高いことから，入学後に専門的な学問や研究を行っていく上で基礎となるであろう高校で学ぶ主要教科の重要性を感じていることが予想され，志望校合格のために,高校３年生の年度末まで，しっかり勉強することを厭わない覚悟を持っている層だと考えることができるからである。そのため，上記で示したような選抜方法や評価方法へ舵が切られた場合，彼らが持つ潜在的な意識へ葛藤をもたらすことは否定できない。となれば，高校の授業で学ぶべきことをしっかりと学んできて欲しいと期待する大学にとっては，本末転倒な結果となりかねないのである。つまり，志願者の背景や潜在的な認識を考慮しない方向で，志願者確保のみが目的化していくと，結果的に，大学にとって本当に欲しい人材から敬遠される可能性すら持つのである。特に，学問および研究等を志向する大学では十分に配慮する点といえる。

(2)「方法（2)」の結果，「やり切った群」のみが平均点が有意に低いことが示された。つまり，受験勉強に対する達成感が強い者ほど，受験勉強を将来的に役立つ経験として認識しているのである（図 1)。この結果は，志望校合格に向けた頑張りと達成感が，受験勉強に対する肯定的な認識に繋がっていることを示している。「受験勉強が将来的に役立つ」という認識は，「受験勉強を通して，将来に役立つものを身に付けた」と解釈できる。このように何かしら役立つものを身に付けることができたという点では，受験勉強の「教育的効果」とも捉えることが可能であり，大学入試がもたらす正の遡及効果の一面を表していると考えることができる。

図１．受験勉強に対する認識



(3)「方法（3)」においては，アンケート調査の回答者は 1,264 名（回収率 91.5%）であった。そして分析項目に対して，「受験経験を通して成長できたものがある」と回答した者は 789 名（62.4%)，「受験経験を通して成長できたものはない」と回答した者は 415 名（33%)，無回答が 59 名（4.6%）であり，半数以上の入学者が，受験経験を通して成長したと感じていることが示された。また，「成長したと感じるものがある」とした回答者の自由記述のカテゴリー化では,「忍耐力」,「集中力」,「自信」,「自制心」,「思考力」,「協調性」,「感謝の心」,「人間性」,「対人関係」,「積極性」,「計画性」,「情報収集力」,「表現力」,「勉強の習慣」という 14 のカテゴリーが作成された。

(4) 表 1 は，各カテゴリーの合計得点の高いものから並べたものである。最も得点が高かったのは「忍耐力」であり，次に「集中力」が続く。やや点差が空いて３つ目に「感謝の心」といったカテゴリーが挙げられた。

表 1. カテゴリーの順位

カテゴリー	合計得点
忍耐力	1713
集中力	1154
感謝の心	767
思考力	594
勉強の習慣	523
自信	391
計画性	364
自制心	268
特になし	253
情報収集力	208
対人関係	205
積極性	204
人間性	191
協調性	189
表現力	114

どの属性にも共通して支持されているのが「忍耐力」や「集中力」である。自由記述から得られた具体例としては，「我慢強さ」や「最後まで頑張ること」そして「集中して勉強する」などが含まれる。受験勉強が志望校に合格するために自分を律しながら目標に向かって集中して努力するという行為を必要とすることは多くの人が経験的に理解できることであり，その一般的な感覚が反映された結果だとみることができる。定員割れが生じている大学が多い中で，競争倍率という点ではＳ大学の選抜機能は十分に機能し

ているため，受験勉強という行為は欠かせなのだろう。一方，「忍耐力」や「集中力」が伴う受験勉強であるが，それらと同じように支持されているのが「感謝の心」である。自由記述から得られた具体例としては「周りの人の支えの大切さ，ありがたさ」「感謝を伝えられるようになった」といったものが含まれる。このように受験経験を通して身についたものには「忍耐力」「集中力」「思考力」といった個人内の認知面だけでなく，「感謝の心」「対人関係」「協調性」などの対人関係を通して得られたと考えられる情動的な側面も挙げられている。つまり，受験経験は，入試で少しでも高得点を取るための学力を身に付けるという個人修練的なものだけでなく，個人内に限定されない彼らを取り巻く環境がもたらす副次的な効果も合わせて考えることが，大学入試の遡及効果を議論する上で留意しておかなければならない点である。

（5）高校教諭を対象としたインタビュー調査からは，「個別指導を要する受験対策がもたらす影響力」「合格実績を左右するクラスの雰囲気」「受験勉強を通して成長する生徒の姿」などの高校生活における具体的な場面に関する情報が得られた。これらの結果からは，大学入試に向けた受験勉強が，単なる志望校合格に向けた取り組みに留まらず，人間関係やクラス運営にも影響を与えていることが見て取れる。ある高校教諭は，「大学入試は，現代の高校生にとっての“通過儀礼”のようなもの」と表現しており，同世代の人間の半数以上が，一定期間に同じような目標を目指して，一生懸命になるような環境は，現代においては唯一大学入試のみとなっている様子がうかがえる。仮に，大学入試のような制度が突然無くなることは，多くの生徒が何かに向けて努力するという環境を無くすことを意味しており，学習に向かう外発的動機を大きく減退させる可能性を持つ。その意味において，現在の大学入試がもたらす正の遡及効果を認識しながら入試制度および「入学者受入れ方針」を考えていくことが必要かと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 西郡大，個別大学の追跡調査に関するレビュー研究,大学入試研究ジャーナル, 査読有,21 号,2011,31-38.
② 西郡大・倉元直樹，大学進学希望者の高校生が選好する評価方法とは？-「入学者受入れ方針」を検討する上での一視点-,大学入試研究ジャーナル，査読有,20号,2010,35-41.

〔学会発表〕（計３件）

① 西郡大・藤田修二，入試広報および入試改善に向けた情報収集-高校訪問活動から得られた知見-,全国大学入学者選抜研究連絡協議会,2010. 6.9.北九州国際会議場
② 西郡大，個別大学の追跡調査に関するレビュー研究,全国大学入学者選抜研究連絡協議会,2010.6.9.北九州国際会議場
③ 西郡大・倉元直樹，高校生が大学入試に期待する評価方法-進学校を対象とした調査から-,全国大学入学者選抜研究連絡協議会,2009.5.20.学術総合センター（東京）.

〔図書〕（計１件）

① 西郡大（分担執筆）, 大学入学者選抜における公平性・公正性の再考−受験当事者の心理的側面から−, 拡大する社会格差に挑む教育, 西村和雄他（編）, 東信堂, 2010. 153−174.

〔その他〕（計１件）

① アウトリーチ活動：平成 21 年度受験導研究会講師. 佐賀県高等学校教育研究会進学指導部会. 2009.

６．研究組織
(1)研究代表者

西郡　大（NISHIGORI DAI）
佐賀大学・アドミッションセンター・准教授
研究者番号：30542328